

2018年2月27日

日経新聞石破氏インタビュー詳細

石破氏一問一答 「イシバノミクス、絶対やめて」

2018/2/27 1:30 情報元日本経済新聞 電子版

自民党の石破茂元幹事長は日本経済新聞のインタビューで、9月の総裁選について「無投票はあり得ない」と明言した。やり取りの詳細は次の通り。

■9条「再改正もある」

——憲法9条2項を削除する私案を党憲法改正推進本部に出しました。



憲法9条改正を巡り、石破氏は2項維持の安倍首相案について「賛成するんじゃないですか」と語った。

「今は自衛隊を『必要最小限だから戦力ではない』『戦力ではないから軍隊ではない』と解釈している。小学生でも中学生でも、一番物事を考えないといけない時に、訳の分からないことを教わったら考えるのをやめてしまう」

「それで健全な安全保障の議論がこの国でできるだろうか。私はこれまで何度も国会答弁に立ったが、日本の脅威は何であり、それに見合う装備、人員はどんなものかという本質的な議論をした覚えがない」

——改憲本部執行部は安倍晋三首相の意向に沿って2項を維持する改憲案を3月の党大会までにまとめようとしています。

「(3月の改憲案には) 賛成するんじゃないですか。だが『自分の考えはこう(2項削除)です』ときちんと言う」

——その半年後の総裁選で自民案とは異なる2項削除の改憲をするよう主張できますか。

「まあ、仮定のことには答えません」

——党員が混乱しませんか。

「党員が混乱しないのが総裁選の目的ですか」

——3月に自民案がまとまった場合でも、総裁選で改憲を争点にする妨げにはなりませんか。

「なぜ妨げられるのか。党議決定には従う。9条の再改正というのもあるでしょう。ただ再改正はすごく難しいと思っているが」

「2項改正案に『そんなに危険な考え方を』と国民は思うだろうか。私は本当のことを話せば国民に分かってもらえると思っている。首相は『どうせ分かりっこない』と思っている。その違いだ。根っこが違う」

「理論的に正しいことを理解してもらおうことが政治家の仕事だ。言え言うほど疎まれるが、誰かが言わないとい

けない。(作家の) 三島由紀夫はどうして死んだのか、と思う。思想家は、小説家はそうやって人生をまっとうするのかもしれないが、政治家はそうはいかない」

「私には3年前(の2015年の総裁選)に出なかったことに責任がある。閣僚や党役員に就いていた時は、政権を支えながら否定するのはおかしいと思うから総裁選に出なかった。でも、次も無投票ということはあり得ない」

■出馬潰し、徹底的

——石破派は現在、石破氏を除いて19人。総裁選出馬に必要な推薦人(20人)に1人足りません。出馬できますか。

「官邸側が石破派を切り崩すということか」

——推薦人を他派閥などから出させないようにする方法もあります。

「あり得ることでしょう。怖いとっているでしょうね。怖いからこそ切り崩しもあるかもしれない」

——それでも出馬への自信はありますか。

「ないとは言わない。でも人の気持ちは分からない。32年も国会議員をやっていると『この人はどうしてこんなに変わったんだろう』という人をたくさん見てきた。全く変わらない人も見てきた。いろいろいる」

『三角大福中』や『安竹宮』、『麻垣康三』といわれたように、歴代首相には後継候補がいた。次に総裁選に出そうな人をこんなに徹底的に潰そうとするのは見たことがない」

——額賀派(平成研究会)は近く、竹下亘総務会長がトップに就任する見通しです。首相と比較的距離がある同派は、総裁選で石破氏を支援するでしょうか。

「それは分からない。別にこびているわけではないが、竹下登元首相はあれほど努力し、消費税と引き換えに政権を潰した。もし消費税がなかったら、いまこの国はどうなっていたか。『自分の内閣を潰してでも国家のために』という気持ちは平成研が伝統として持っているものではないか」

——その伝統は額賀派に残っていますか。

「竹下登という人を一番よく知っているのが竹下亘さんだ」

■物価より賃金、目標に

——政府は黒田東彦日銀総裁を再任する人事案を示しました。金融緩和政策は続く見通しです。



「イシバノミクスは絶対にやめよう」と語る石破氏

「物価の2%上昇というのは、政策目標として適切なのだろうか。物価の上昇がよいと思う人は世の中にどれだけいるのか。政策目標とすべきなのは、賃金の上昇だ。賃金が上がらないのは売り上げが伸びないからだ」

「国内総生産（GDP）の7割を占めるサービス業の生産性は恐ろしく低い。だから人が集まらないという悪循環に陥っている。日本のサービスは非常に高度であり、正当な対価を受け取る仕組みが必要だ。労働者のスキル向上とセーフティーネットを張ったうえで、製造業などからサービス業に雇用をシフトし、生産性を高める。それがアベノミクスの次に求められる経済政策だ」

——そうした議論を予算委員会で、できないのですか。

「無理ですよ。私なんか絶対質問に立たせてもらえない。お願いしているがダメ。（嫌がっているのは）官邸でしょ」

——地方への遊説を続けています。

「47の都道府県では、一つの指標の数字が倍も開きがあるものがいっぱいある。それぞれの市町村が、自分の街のことを考える。地方に雇用と所得を取り戻す処方箋は（中央省庁が集う）霞が関で分かるはずがない。地方創生を始めて、転入者が転出者を上回る『社会増』に転じた市町村もある。そうした流れを全国に広げるために足りないのは人材だ」

「会社員人生は40代で決まる。本当はもっとできるはずなのに、いろんな巡り合わせで上に行けない人がいっぱいいる。そういう新しい人材を地方が迎える。雇用が生まれ消費が生まれ、新しい産業が生まれる。ローカル経済は、グローバル経済と違って国際競争にさらされない。伸びしろは大きい」

——キャッチコピーは頭の中にありますか。

「必要だと思っている。でも『イシバノミクス』は絶対やめようね」

（聞き手は政治部 上林由宇太）